

「お腹がすいたね。はい、どうぞ」「だっこしようね。気持ちいいよ」というあたたかい言葉かけとまなざしは赤ちゃんに十分伝わります。そうすると、「自分をあたたかく見守ってくれる人がいる」と感じていくようになり、それがこれから成長していく上での「基本的信頼感」の基盤となっていくのです。安心感いっぱい、スキンシップいっぱいの中で、あたたかい親子関係を作りあげましょう。

## 2 幼児期 2～3歳 三つ子の魂 百までも

ハイハイ、つかまり立ちと成長してきた子どもは、どんどん手足を自由に動かせるようになり、記憶力や言語力も日に日についてきます。そうすると、何でも自分でやりたがるようになって「魔の二歳児」などと言われるようになっていきます。しかし子どもが何でも自分でしたいと言いつつ出すことはごく自然なことであり、反抗しているのではなく自主性が出てきたのだと理解してください。「自分で考える・思い浮かべる」そして“試してみる”“最後までやり抜く”という力をじっくりつけていくのもこの頃からです。それは遊びの中から始まり、周囲にある何気ないものがすべて材料となっていきます。

また大人の行動をすべてお手本にすることを意識しててください。それと同時に、ものごとの善悪もきちんとしつけていきましょう。節目にはしっかりと“だめなものだめ”“よそはよそ、うちのうち”という信念をもって接することです。「三つ子の魂百までも」と昔から言われるとおりです。

## 3 就学前 4～5歳 社会のルール、家庭のルールを身につけさせましょう

この頃になってくると、さまざまな能力が完成され、積極的に物事と関わり、集団と関わることに喜びを得るようになります。そして、どうしても言葉や知識が先行してしまいがちなこの頃にこそ“五感”を使って、さまざまな体験や経験をさせてあげてほしいと思うのです。ヌルヌルやベタベタは、実際に経験してみないとわからない言葉です。悔しい、寂しいという感情は、子どもどうしが交わらないとわからない感情です。ですから、この時期からどんどん五感を使っての活動と、子どもどうし関わりの機会を作ってあげてください。基本的な生活習慣を身につけるとともに、社会のルール・家庭のルールといった社会性も身につけさせていきましょう。子どもたちは実際に体験しなければわからないことばかりなのです。

## 4 児童期 6～12歳 努力したことを認めてあげて

学校では、同年齢の集団での活動がほとんどです。その中で友だちに共感し、我慢や分けあい、交代などができるようになってきます。そこに基礎学力の習得という分野が加わってきます。道徳的な行いと勤勉性が求められるようになってくるのです。まさしく「知・徳・体のバランス」が大切になってきます。この頃は結果を第一に考えずに、**頑張っているその過程こそ重大**であり、どれだけ最後まであきらめずに努力したかということを確認してあげましょう。

また「早寝・早起き・朝ごはん」と言われている生活のリズムを整え、その中で親子がしっかりとコミュニケーションをとり合い、どんなことでも話ができる関係を作っていきたいものです。

## 5 青年期 13～18歳 人生の先輩としてあたたかい目で

あたたかい家庭という懐から、いよいよ社会という世界に出て行かなければならないと模索し始めるこのころの精神状態は、とてもデリケートなものになっています。この葛藤時期にこそ、家庭が安らぎの場所とならなければなりません。

「あなたはあなたらしく」というメッセージを伝え、子ども自身が**“自分が好き、自分は生きている価値がある”**と思う自尊心を育てなければなりません。そうして、子どもを一個人として信じ、見守るとともに、自立に向けて、また将来に向けて、今度は人生の先輩として話し合えるような親子でありたいものです。

このように、成長・発達に応じた特性をきちんと把握し、子どもの心に寄りそうことで、新しい子どもの姿が見えてくるかもしれません。「どうしてこの子はこうなのだろう」という事からも「だからこうなのだ」と理解できるでしょうし、「楽しく子育てする」ことにもつながるでしょう。それこそが「受容と共感」です。発達段階ごとにしっかりその子どもの気持ちを受け止め、共に感じ、正しく導いてあげることです。

そうして、自分のことをわかってくれて“愛されている”と感じ、安心感をしっかりとつことができれば、周りの人と関わり、「信頼関係」を作り上げていけるようになります。